

カムチベット語塔公 [Lhagang] 方言における間投詞と談話標識

鈴木 博之

四郎翁姆

国立民族学博物館

キーワード：カムチベット語、Minyag Rabgang 方言群、間投詞、あいづち、フィラー

1 はじめに

本稿では、カムチベット語 Minyag Rabgang (木雅熱崗) 方言群 Lhagang (塔公) 方言¹の間投詞を記述し、加えて、まとまった言語資料を転写するときにおける間投詞の記述上の問題点を検討する。あわせて、あいづちやフィラーなどの談話標識も記述の対象とする。擬音語・擬態語は含めない。

間投詞は、記述言語学では言語によって「閉じた語類」をなす1つのカテゴリーとなる (Aikhenvald 2015:200)。その機能は話者の感情を表現すると言える (Aikhenvald 2015:98)。チベット系諸言語に関する最近のまとまった記述研究には、間投詞の記述がある。たとえば、邵明園 (2018:162-163) や海老原 (2019:96-97) などが挙げられる。この主題に関する記述は少ないが、記述文法を構成する一部分であることには変わりがない。また、記述の分量からも、チベット系諸言語において間投詞は閉じた語類であると認められる。

筆者は Lhagang 方言の自然発話や長編資料を書き起こす際に間投詞を取り扱う必要に迫られたが、特に統一した基準で取り扱ってきたとは言えなかった²。統一的な基準を設けるか否かという問題のほか、記述すべき内容は何であるのかも判断に迷う場合があった。このため、間投詞の語形と音声学的な特徴、またその機能をまとめて参照できる形で提供しておくのが有用であると考えた。

間投詞は、その品詞の性質上、音韻表記が困難である。Aikhenvald (2015:200) は「間投詞は一般的ではない音声と音節構造を含む傾向にある」と述べている。そのため、抑揚など韻律特徴も含めて記述しなければ正確を期す記述にはならないが、そこまでの説明がないのが通例である。本稿では、著者が物語収集とその発話構造の分析を通して気がついた間投詞の用法をもとに、また Lhagang 方言母語話者である第2著者による内省に基づく資料を加え、簡にして要を得た間投詞の記述を目指す。Lhagang 方言の長編資料のうち筆者が公開しているものには、鈴木ほか (2015) の『菩薩の愛する地・塔公』、Suzuki & Sonam Wangmo (2017bc, 2018) の『王

¹ Lhagang 方言の社会言語学的特徴の概観については、Suzuki & Sonam Wangmo (2015ab, 2017a) を参照。文法特徴の概観については、鈴木、四郎翁姆 (2016) を参照。

² すでに出版した論文・資料の中には、本来擬音語である動物の鳴き声を語釈において間投詞として記述したのものがある。

様のぶた』(2017b)、『雲雀になった王子の妻』(2017c)、『3羽の鳥』『雲雀とシャコ』(2018)がある。これらに加え、未公開のものに『羊と狼』『白いゾモ』『うさぎと虎』の資料を用いる。

なお、本稿で記述する形式には、Lhagang 方言の音体系(付録参照)に認められない特徴、たとえば音節核となる鼻音などが含まれる。間投詞の音形は、原則音声表記であることを断っておく。また、見出し語部分には声調符号を付さない。

2 独立した発話における間投詞と談話標識

独立した発話における間投詞とは、発話の文脈がなく、間投詞単独で機能を果たすものを指す。物語などに現れる例で出版されているものについては、当該箇所を指示する。用例の文脈については、当該文献を参照されたい。

2.1 間投詞

?a

意外であることに遭遇したときや突然思い出した時に発する。

?e

意外であると認識した場合に発する。

?o

驚いたときに発する。

『3羽の鳥』の(2.10, 2.13)や『雲雀とシャコ』の(2.5)に実例がある(Suzuki & Sonam Wangmo 2018)。最後の例について、語釈に変更を加えて以下に掲げる。

- (1) 'te k^ho-ro ^ma: la ʔo 'hseʔ-joʔ s^ha reʔ
 それから 3-自身 下へ INTJ 殺す-CONT.INFR
 それから、(雲雀は) 下へ・・・あっ、(シャコの子を) 殺してしまったんじゃないかな。

なお、(1)の発話における間投詞は、語り手の感情を表出している。

fio

驚いたとき、何かを突然思い出したときに発する。

『王様のぶた』の(7.10, 7.12)に実例がある(Suzuki & Sonam Wangmo 2017b)。後者について、語釈に変更を加えて以下に掲げる。

- (2) 'fio ʔp^huʔ ŋgo 'lo^hte ʔja la ʔ^hidzuʔ-t^he: 'ta
 INTJ [儀式の名称] 上へ 走る-PFT.SEN そのとき
 ʔ^ho-la ʔ^hduʔ^hjaʔ k^hã mba 'zei-nə ʔ^hdo: su 'ɕaʔ^htɕeiʔ ʔ^hdzaʔ-t^he:
 3-DAT [ヤクの呼称] 言う-CONJ 絶対に 一回蹴る-PFT.SEN
 「ああっ、『ぶたの頭を回す儀式』が行われたとき、あいつ（和尚）は俺を『悪魔の茶色いヤク』と言って、一回蹴っ飛ばしやがったんだ」（と、茶色の野生ヤクは言いました）。

(2)に現れる間投詞は、物語の中の「茶色の野生ヤク」の感情を表出している。

ʔa ma

意外であることに驚いたときに現れる。

ʔa ts^ha

熱いものに触れてしまった時に発する。

ʔa tsi:

驚いたときに発する。

『うさぎと虎』に以下のような実例がある。

- (3) ʔa tsi: ʔɕ^hoʔ-la-nə 'zĩ mbo-tɕeiʔ ʔza-ʔ^hdzu ʔjoʔ-k^he:
 INTJ 2-DAT-TOP おいしい-NDEF 食べる-NML EXV-PFT.NSEN
 わあ、おいしそうな食べ物をもっているね！

(3)に現れる間投詞は、物語の中の「虎」の感情を表出している。

ʔa ha / ʔo ho

疲れたときに発する。2度繰り返して用いられることがある。

『白いゾモ』に以下のような実例がある。この状況は、老いた鬼女が水を遠くから汲んで運んできたところを描写している。

- (4) ʔa ha ʔa ha-tu ʔo ho ʔo ho ʔzei-nə ʔ^hke: t^hoʔ ʔja la 'fio: k^ha-nə
 INTJ.RDP-COM INTJ.RDP 言う-CONJ 階段の上 上へ 来る-とき-CONJ
 (老いた鬼女が) はあはあ、ふうふうと言いながら階段の上へ上がってきたとき、

ʔa ra ra / ʔa tsi tsi

疲れたときに発する。通常の語形式と同様に、第3音節は弁別的声調が認められず、低平で実現される。

『白いゾモ』に以下のような実例がある。直前の例(4)と同様に、この状況もまた老いた鬼女が水を遠くから汲んで運んできたところを描写している。

- (5) ʔa ra ra-tu ʔa tsi tsi `ze:nə `nõ `fiə:k^ha
 INTJ-COM INTJ 言う-CONJ 家の中 来る-とき
 (老いた鬼女が) ああ、よいしょと言いながら家の中へ入ってきたとき、

^htu fia

掛け声の一種である。「さて、さあ」と訳しうる。全体で下降の声調をとる。

『雲雀になった王子の妻』の (6.2) に実例がある (Suzuki & Sonam Wangmo 2017c)。語釈に変更を加えて以下に掲げる。

- (6) ^htu fia `tə ⁿdzo: mo-tə ⁿdzə-^{fi}go tu ^hsã-k^he:
 INTJ そのとき 雲雀-DEF 捕まえる-FUT.SEN 思う-PFT.NSEN
 「さあて、雲雀を捕まえてやる」と (父王は) 思いました。

2.2 談話標識

談話標識については、例をあげないことにする。

te

発話を続けていくときに、続きがあることを示す。また、続くべき語句を探している場合に、フィラーとして2~3回繰り返すこともある。日常会話でも語りでも頻繁に用いられる。「それで」、「で (ね)」、「で、で、で、」などと訳しうる。

語釈には「間投詞」ではなく、「接続詞」または直接「それから」とすることもできる³。複数の語類をまたぐ性質がある。

ʔə jɪ:

発話途中でポーズをはさむときに現れる、フィラーの一種である。咳払いに近いと言える。

音形を見ると、チベット文語形式の *e yin* と対応するように見えるが、「そうだろうか」という文字通りの意味で用いているわけではない。

『雲雀になった王子の妻』の (1.2) に具体例がある (Suzuki & Sonam Wangmo 2017c)。

tə tə reʔ

会話や語りにおいて、発話したい語が出てこない場合にフィラーとして用いられる。「あれだよ、あれ」と訳せる。通常2つの声調領域をもち、音韻表記で /tə 'tə reʔ/ となる。

語源としては、チベット文語形式の *de de red* と対応すると見られ、直訳では「あれはあれだ」となる。

『雲雀になった王子の妻』の (3.7) に具体例がある (Suzuki & Sonam Wangmo 2017c)。

³ これまで筆者は「それから」と語釈を与えてきた。

tə ri ^hdə re?

特に語りにおいて、続きの発話が出てこない場合にフィラーとして用いられる。「ええっと」と訳して問題ない。

語源としては、チベット文語形式の *de red 'di red* と対応すると見られ、直訳では「あれだ、これだ」となる。時によって、語りに現れるこの形式を、より語源に近く「何と云えばいいのか」や「ああでもこうでもない」というように訳すことも可能である。

複数の物語に現れる。この中で、『王様のぶた』(Suzuki & Sonam Wangmo 2017b) では本文中に書き入れたが、他のものでは原則省略した。

te: ze: ^hdzɯ rə la / ze: ^hdzɯ tə

特に語りにおいて、ある事柄を言葉でうまく表現できないときにフィラーとして用いられる。「どう言ったらいいのか」というニュアンスがある。

3 応答に現れる間投詞

応答に現れる間投詞とは、間投詞単独で機能を果たすものの、何らかの発話を受けて、それに反応して現れる場合を指す。談話標識としての機能を兼ねるが、一律間投詞と呼ぶ。

ja

対話相手の発話に同意するときに用いられる。2度繰り返されることが多い。

音調はほぼ上昇調である。

fio ja

上記の ja にほぼ共通する。相手の発話に対し、十分納得して肯定の返事をするときに用いる。

音調は各音節が上昇調をとる。各音節は単独で間投詞として用いられる形式と共通するが、2つの音節を分離して解釈するのは適当でない。実際の記述にあたっては、[fio jaʌ] と記述することができる。

te

対話相手に続きの発話を促すときに用いる。単独で発話が完成する。

(7) te

INTJ

それで?/それから?

音調は上昇調をとる。

ŋ

対話相手の発話にはい、いいえの応答を表すときに現れる。単独で発話が完成する。音表記はいずれもŋで受け入れられるが、音調が異なる。

(8) a ŋ↘
INTJ
はい。

b ŋ↗
INTJ
いいえ。

便宜的に「はい」「いいえ」と訳すが、実際の会話では「うん (肯定)」「ううん (否定)」と訳すほうが現実的である。

「はい」のŋは常に短く発音されると言える。しかしながら、「いいえ」については、ŋが長く発音される [ŋ:] という現れがある。また、その音調が場合によっては [ŋ²² ŋ⁵⁵] のように、あたかも独立した声調を担う2つの音節核が存在するかのような現れをとる。全体としては上昇の音調をとっているため、音声転写では [ŋ↗] としておいて問題ない。

m

対話相手の発話にあいづちをうつ場合に現れる。同一の音節が2度または3度繰り返されることが多い。通常は各音節とも下降の音調になる。単独で発話が完成する。

(9) a m↘
INTJ
うん。

b m↘m↘
INTJ
うんうん。

あいづちには両唇を閉じないŋ [ŋ↘] も用いられる。これは「はい」の意味で用いている、つまり改まったあいづちとして現れているのか、単にmの変異として許容される範囲であるのかは不明である。さらに多くの事例の収集と検証が必要である。

4 まとめ

本稿では、Lhagang 方言の間投詞および談話標識を記述した。間投詞は音調とともに意味が異なる場合があることを明らかにし、それを記述することで、実際に音転写が必要な時に参考に行えるようになることに配慮した。ただし、間投詞は往々にして感情を反映する抑揚を伴うため、本稿の記述ではなお不十分な部分もある。事例の収集と必要な記述がこれからの課題である。

補遺：Lhagang 方言の「感嘆語」

『羊と狼』には、次のような例がある。

- (10) 'te ^hduʔ-k^he: ^hgõ:
 それで つらい-PFT.NSEN EXCLM

それで、(母羊と子羊は) 悲しくなりました。かわいそうに！

この/^hgõ:/は完了アスペクトとともに、かつ動詞句に続いて現れる形式であり、明らかに本稿で記述した間投詞とは異なるが、「かわいそうに」という、感嘆を表現する音節である。品詞上、間投詞に非常に近いが、「感嘆語」(exclamative) という品詞を立てておく。現在のところ、/^hgõ:/しか見つかっていない。

付録：Lhagang 方言の音体系とその表記（物語の語り手の音体系に従った拡張版）

・音節構造

最大の音節構造（分節音の配列）は次のようである。

${}^c C_i GVC$

このうち C_i （初頭主子音）と V （音節核の母音）が必須であり、 $C_i V$ を音節の最小構成とする。 c には前気音及び前鼻音が現れ、 G には w, j が現れる。

・子音

主子音 (C_i) 位置に現れる要素の一覧は以下のようである。口蓋垂音系列をもつ話者もいる。

| | | 両唇 | 歯茎 | そり舌 | 硬口蓋 前 後 | 軟口蓋 | 口蓋垂 | 声門 |
|-----|------|-----------------------|-----------------------|-------|--------------------------|--------------------------|-----------|------|
| 閉鎖音 | 無声有気 | p^h | t^h | t^h | | k^h | (q^h) | |
| | 無声無気 | p | t | t | | k | (q) | ʔ |
| | 有声 | b | d | d | | g | (g) | |
| 破擦音 | 無声有気 | | ts^h | | $tʃ^h$ | | | |
| | 無声無気 | | ts | | $tʃ$ | | | |
| | 有声 | | dz | | $dʒ$ | | | |
| 摩擦音 | 無声有気 | | s^h | | $ʃ^h$ | | | |
| | 無声無気 | ϕ | s | $\ʃ$ | $ʃ$ | x | | h |
| | 有声 | | z | | $ʒ$ | γ | (β) | fi |
| 鼻音 | 有声 | m | n | | η | η | | |
| | 無声 | $\underset{\cdot}{m}$ | $\underset{\cdot}{n}$ | | $\underset{\cdot}{\eta}$ | $\underset{\cdot}{\eta}$ | | |
| 流音 | 有声 | | l | r | | | | |
| | 無声 | | $l̥$ | | | | | |
| 半母音 | 有声 | w | | | j | | | |

・母音

舌位置による一覧は次のようである。

| | | | | |
|--|------------|-----|-----|-----|
| | i | $ɯ$ | $ɯ$ | u |
| | e | $ə$ | | o |
| | ϵ | | | $ɔ$ |
| | a | | | $ɑ$ |

母音には長短および鼻母音/非鼻母音が弁別的である。母音の長短と鼻母音/非鼻母音は互いに独立している。

・超分節音素

語単位として、次のピッチパターンが認められる。

ˉ: 高平

ˊ: 上昇

ˋ: 下降

ˆ: 上昇下降

略号一覧

| | | | | | |
|------------|------|-------------|------|------------|-----|
| 2 | 2 人称 | EXCLM | 感嘆語 | NSEN | 非感知 |
| 3 | 3 人称 | EXV | 存在動詞 | PFT | 完了 |
| COM | 共格 | FUT | 意思未来 | RDP | 重複 |
| CONJ | 接続詞 | INFR | 推測 | SEN | 感知 |
| CONT | 継続 | INTJ | 間投詞 | TOP | 主題 |
| DAT | 与格 | NDEF | 不定標識 | | |
| DEF | 定標識 | NML | 名詞化 | | |

参考文献

海老原志穂 (2019) 『アムド・チベット語文法』 ひつじ書房

鈴木博之、四郎翁姆 (2016) 「カムチベット語塔公 [Lhagang] 方言の文法スケッチ」『言語記述論集』 8, 21-90 電子版：<http://id.nii.ac.jp/1422/00000897/>

鈴木博之、四郎翁姆、拉姆吉 (2015) 「チベット語塔公 [Lhagang] 方言の物語『菩薩の愛する地・塔公』 訳注—塔公方言の多層構造と物語の異同に関する考察を添えて—」大西正幸・千田俊太郎・伊藤雄馬編『地球研言語記述論集』 7, 111-140
電子版：<http://id.nii.ac.jp/1422/00000874/>

Aikhenvald, Alexandra Y. (2015) *The art of grammar: A practical guide*. Oxford University Press.

Suzuki, Hiroyuki & Sonam Wangmo (2015a) Quelques remarques linguistiques sur le tibétain de Lhagang, «l'endroit préféré par le Bodhisattva». *Revue d'études tibétaines* Vol. 32, 153-175.
Online: http://himalaya.socanth.cam.ac.uk/collections/journals/ret/pdf/ret_32_05.pdf

—— (2015b) Lhagang Tibetan of Minyag Rabgang Khams: Vocabulary of two sociolinguistic varieties. *Asian and African Languages and Linguistics (AALL)* 10, 245-286.
Online: <http://hdl.handle.net/10108/85072>

—— (2017a) Language evolution and vitality of Lhagang Tibetan: a Tibetic language as a minority in Minyag Rabgang. *International Journal of the Sociology of Language* 245, 63-90. doi: 10.1515/ijsl-2017-0003

—— (2017b) *King's pig*: A story in Lhagang Tibetan with a grammatical analysis in a narrative mode. *Himalayan Linguistics* 16.2, 129-163. Online: <https://doi.org/10.5070/H916233598>

—— (2017c) *Prince's wife become a lark* in Lhagang Tibetan of Khams. *Kyoto University Linguistic Research* 36, 71-91. Online: <https://doi.org/10.14989/230688>

—— (2018) Two folktales in Lhagang Tibetan (Minyag Rabgang Khams): *Three Birds and Lark and Partridge*. *Asian and African Languages and Linguistics (AALL)* 13, 131-150. Online: <https://doi.org/10.15026/92954>

邵明園 (2018) 《河西走廊瀕危藏語東納話研究》 中山大學出版社

[付記]

本研究に際しては、平成 28-30 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A) 「チベット・ビルマ語族の繋聯言語の記述とその古態析出に関する国際共同調査研究」(研究代表者：長野泰彦、課題番号 16H02722)、平成 29-令和元年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究 (A) 「チベット文化圏東部の未記述言語の解明と地理言語学的研究」(研究代表者：鈴木博之、課題番号 17H04774) および平成 29-令和元年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (B) 「高精細度広域地図による中国および隣接する多言語地域の地理言語学的研究」(研究代表者：遠藤光暁、課題番号 18H00670) の援助を受けている。

Interjections and discourse markers in Lhagang Tibetan

Hiroyuki SUZUKI

Sonam Wangmo

abstract

This article provides a list of interjections and discourse markers attested in Lhagang Tibetan. The data has been collected from everyday conversations as well as storytelling. It consists of two main parts: the use of interjection alone and in response.

Examples are described with prosodic forms if necessary. This practice can help readers recognise the function of a given interjection.

A supplement on ‘exclamative’ is added at the end of the article. The example suggests that Lhagang Tibetan distinguishes interjections from exclamatives.

受理日 2020 年 4 月 11 日